

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

1. 研究課題

小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究

Studies of the critical reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident

2. 研究代表者氏名

正清 健介

Masakiyo Kensuke

3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

4. 研究目的

本研究の目的は、小津安二郎映画が英国で公開された1957年から、米国のD. ボードウェルが『映画の詩学』を発表し小津研究がピークを迎える1988年までの欧米における小津受容の実態を当時の映画批評の考察を通して明らかにすることである。

小津研究は既に多くあるが、その殆どは1970・80年代の研究に代表される作品研究である。しかし本研究は、作品が歴史的にどのように受容されたかを明らかにする受容研究であり、中でも欧米での受容に着目する。このような受容研究は、生前の小津の国際的評価の低さもあって未だ進んでいない。またそもそも、本研究が考察対象とする欧米の小津映画批評の殆どは未邦訳であり、その存在自体が日本では知られていないという現状がある。本研究は、その未だ手付かずの小津批評を今回初めて網羅的に調査・考察しようと試みる点で有意義であり、小津作品の最初期の国際的評価を新たに提示するものとなる。

The purpose of this study is to analyse film criticism in order to shed new light on the reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident, from 1957 when his crowning achievement Tokyo Story (1953) was shown in London for the first time through to 1988 when the American film historian David Bordwell wrote Ozu and the Poetics of Cinema (1988) - the definitive work on Ozu' s films in English.

Although there are many studies of Ozu' s films, almost all of them, especially 1970s-' 80s works, consist of analysis of both the narrative and the cinematic textuality of the films. In contrast, this study is a study examining how Ozu' s films were received historically overseas, especially in the Occident (the United

States, England, and France). Such historical reception studies of Ozu's films have not been carried out before because of Ozu's lag in terms of overseas popularity. Also, since Western criticism of Ozu's films has not been translated into Japanese, it is almost unknown in Japan. This study intends to analyze this previously untouched Western criticism for the first time, thereby highlighting the beginnings of international appreciation for Ozu's cinematic art.

5. 本年度の研究実施状況

2020年4月～9月は、班員それぞれが小津映画を対象にした欧米の映画批評を、図書館や国立映画アーカイブ等にて調査し、リストを作成した。役割分担は次の通りである。正清と板井は仏国における映画批評を調査した。特に正清は映画批評誌『カイエ・ドゥ・シネマ』、板井は『ポジティブ』における小津映画批評を調査し、その考察まで進めた。伊藤と宮本は英語圏の小津映画批評を調査した。伊藤は英国の批評、宮本は米国の批評を調査し、リストを作成した。

2020年9月18日、オンライン（Zoom）で第一回研究会を開催した。班員は発表者としてそれぞれ4月からの調査の報告を行った。またこれに合わせて、副班長・森本はコメンテーターとしてそれぞれの報告に対してコメントをした。

10月～3月は、プロジェクト経費を活用し関係資料（書籍）を補いつつ調査で得た批評の読解・考察を進めた。

2021年3月12日、人文科学研究所内において第二回研究会を開催し、班員それぞれ研究成果の報告を行なった。

6. 本年度の研究実施内容

2020-09-15 小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究 フランス『カイエ』の小津映画評 発表者 正清健介 一橋大学大学院言語社会研究科 フランス『ポジティブ』の小津映画評 発表者 板井仁 一橋大学大学院言語社会研究科 アメリカの小津映画批評 発表者 宮本明子 同志社女子大学表象文化学部 イギリスにおける小津映画批評 発表者 伊藤弘了 関西大学文学部 コメンテーター 森本淳生 京都大学人文科学研究所

2020-03-12 小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究 フランスにおける小津映画受容 発表者 正清健介 一橋大学大学院言語社会研究科 発表者 板井仁 一橋大学大学院言語社会研究科 アメリカにおける小津映画受容 発表者 宮本明子 同志社女子大学表象文化学部 イギリスにおける小津映画受容 発表者 伊藤弘了 関西大学文学部 (コメンテーター 森本淳生 京都大学人文科学研究所)

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

森本 淳生(副班長)

学外

正清 健介(一橋大学大学院言語社会研究科)、板井 仁(一橋大学大学院言語社会研究科)、
宮本 明子(同志社女子大学表象文化学部)、伊藤 弘了(関西大学文学部／京都大学大学院
人間・環境学研究科／京都府立大学文学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

| 区分 | 機関数 (必須) | 受入人数 | | | | | 延べ人数 | | | | |
|---------------|-------------|------|-----|------------------|------------------|------|------|-----|------------------|------------------|------|
| | | 総計 | 外国人 | 若手研究者 (40歳未満) | 若手研究者 (35歳以下) | 大学院生 | 総計 | 外国人 | 若手研究者 (40歳未満) | 若手研究者 (35歳以下) | 大学院生 |
| 学内(法人内) | | | | | | | | | | | |
| 国立大学 | | | | 1 | | 1 | | | 2 | | 2 |
| 公立大学 | | | | | | | | | | | |
| 私立大学 | | | | 2 | | | | | 4 | | |
| 大学共同利用機関法人 | | | | (1) | | | | | (2) | | |
| 独立行政法人等公的研究機関 | | | | | | | | | | | |
| 民間機関 | | | | | | | | | | | |
| 外国機関 | | | | | | | | | | | |
| その他 | | | | | | | | | | | |
| 計 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 0 | 2 |
| | | (0) | (0) | (1) | (0) | (0) | (0) | (0) | (2) | (0) | (0) |

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究は2021年3月に終了するが、それ以降、4人の班員それぞれは、研究期間中に得た研究成果を論文ないし研究ノートとして公表する予定である。その発表媒体は、4人の班員が所属する学会（日本映画学会、表象文化論学会、日本映像学会等）の学会誌、もしくは所属研究機関の紀要・機関誌になる。

今後の展開としては、今回の研究で対象とした欧米の小津映画批評のいくつかを班員自ら邦訳し、「欧米小津映画批評集」として集成し、共訳書として刊行することを目指したい。